言葉を上手に、楽しもう

巻頭特集では、香川大学が取り組む
グローバル人材育成について紹介をしました。
世界で活躍できる人材になるには語学力が求められます。
難しく考えがちな分野ですが、実は言葉はとても楽しいもの。
第２特集では、言葉の楽しさを知る二人の先生に話を聞きました。

外国語と気楽なお付き合いで、さあ世界へ

ポール・バテン

PAUL BATTEN
ポール・バテン
教育学部　英語教育
准教授
専門分野：応用言語学

言葉に込められた日本人のこだわり

二ュージーランドから香川大学にやって来て16年になるバテン准教授。近くに海があり、自転車でどこでも行ける高松が大好きだと言います。

「ニュージーランド人は旅する民族。できるだけ遠いところ、できるだけ文化の違うところに行きたがります。両親は退職してからパプアニューギニアに行ったし、弟はプロのヨット選手なので世界一周もしたことがある。わたしも世界30カ国を訪ねたことがありますが、家族には、旅に関してはビギナーだと言われます」。

ニュージーランド人と違って、今の日本人は内向き志向と言われていますが？

「でもね、バックパッカーの若者や退職後の年輩のご夫婦など、旅先で日本人をよく見かけますよ。日本人は謙遜という気質があるからか、自分たちの否定的な側面に目を向けがちです。それは言葉にも表れています。『ありがとう』は『有ることが難しい』、『すみません』は『済んでいない』と、感謝や謝罪の言葉にも否定のニュアンスがあります」と、専門の比較言語学の見地から日本人のモノの考え方を指摘します。そして、そのことが、外国語習得が苦手になる一因かもしれないと。

時にはラフなお付き合いも必用

「日本には言葉を難しくしたがる文化があるように思います。例えば名前。わたしのポールなんて、簡単でよくある名前でしょ。でも日本人の名前は漢字1文字ごとに意味があって、名前自体が意味の深い個人情報なのです。学生にメアドを聞くと、たいていものすごくややこしい。迷惑メール対策だけじゃなく、言葉の意味を重く捉える文化の一端と感じます」。

バテン准教授は友人数人と1週間だけトルコ語を勉強し、ホテルやレストランでトルコ語を使ってみる、という目的だけのためにトルコ旅行をした事があるそうです。ツールとして、楽しみとして、ちょっとだけ言語を学んでみるというのは、わたしたちにはない感覚かもしれません。「言葉とラクにつきおう」と意識してみる事も時には必要そうです。

英語なんかに負けるな

バテン准教授が学生に英語の会話力をつけさせる際に、大切だと思うのが、「分からないことを分かるようにする実践的な技術」だと言います。話しかけられて意味が分からない時、単語や表現を知らない、発音に慣れない、喋るスピードが速すぎるなど、理由がどうあれ、問題解決のためにはこちらから質問を発しなければなりません。その方法をいかに多く持っているかが重要だと言います。

「でももっと大事なのは、国の文化や個人の意見などを交換し合いたい気持ち。その道具として英語があるのです。英語に負けたままではいかん。分からんかったら自分で解決する技を持たんと。人生、そんなもんで」。

流暢な日本語の中に、時々べタな讃岐弁を挟みつつ語ってくれるバテン准教授。現在、ニュージーランドのクライストチャーチ・ポリテクニック工科大学やタイのチェンマイ大学との、交換留学生のコーディネートも担当。数年前からはタイ語も勉強中で、知らない文化、知らない言葉に対する好奇心は留まるところを知りません。

英語を好きになるコツ教えます

水野康一

KOICHI MIZUNO

みずの　こういち
大学教育開発センター 外国語教育部長
香川大学経済学部 地域社会システム学科　教授
専門分野：英語教育、異文化間コミュニケーション

英語教育を専門とする水野教授は、教育学部の出身ですが、もともと英語ではなく国語の教員を志望していました。その理由は「英語が苦手」だったから。大学受験に向けての苦手科目克服のため、高校2年生の秋頃から集中的に勉強しましたが、なかなか結果が出ません。ところが半年ほど経った頃から徐々に成績が上がりはじめ、その後は安定して点の稼げる得意科目に。

「英語の成績は、学習時間が100時間を超えた頃から伸び始めます。即効性はないけれど、努力を裏切らない科目。英語が好きになりたいなら、だまされたと思って、まずは半年間コツコツ勉強してください。現金なもので、英語嫌いだったはずのわたしも成績が上がるといつのまにか英語好きになっていて、外国人と会話してみたい、海外で学びたいと、自然に希望が広がっていったんです」。

大学の3年次に1年間海外留学しようと決意した水野教授。TOEFL（留学に必要な英語検定試験）の受験勉強も早期に始めました。情報を集め、ネットワークを広めるためキャンパスにいる留学生にも積極的に話しかけ、会話力も磨きました。目標どおり、ニュージーランドのオークランド大学に1年間交換留学。英文学、英語学、社会言語学、教育統計学を、現地の学生と机を並べて学んだことは、大きな自信に繋がったそうです。

英語って面白い、と思わせる機会づくり

苦手意識を克服して英語を職業にした自らの経験を活かし、現在も、学生にいかに興味を持って英語を学んでもらうかを常に考えています。ゼミでは、「地域のインバウンド観光（海外からの訪日観光）」をテーマとして、アンケートを作成して外国人観光客への聞き取り調査をしています。また観光地の英語案内文を作り、栗林公園に出向いてガイドの練習をすることもあります。どちらも外国人とのコミュニケーションの機会づくりが目的です。さらに、生涯学習の公開講座では、「映画で学ぶ英語」というクラスを持ち、好評を博しています。今秋から始まる講座では『カサブランカ』を題材として英語表現の多彩な面白味を教えます。

「日本人は英語が苦手と言われますが、本当は英語に興味があり、喋れるようになりたいと思っているはず。英語が使えない人に未来はないと危機感を煽るのではなく、英語が面白いと思える機会をつくり、さらに学びたい、上達したいという気持ちを後押しするのがわたしの役目です」。

学部を超えた教育プログラム「香川大学ネクストプログラム」の「グローバル人材育成プログラム」は、香川大学生の海外留学の実現を支援しようとする取り組みで、水野教授はその中心的なスタッフです。

「留学は、現地での学びと同じくらい事前の学習が重要です。言葉は、外国に行けばどうにかなると思っている学生も多いですが、TOEFLをパスしなくては留学できないし、言葉の習熟度が高いほど、現地で得られるものも大きくなります。留学資金稼ぎのためアルバイトに励む学生を応援したい気持ちもありますが、お金ならいろんな形で「未来の自分」から借りてこられる。何より大事なのは勉強のための時間です。早期に十分な学力を身につけ、留学先でより多くのすばらしい経験をして欲しいと思っています」。

夏休みのゼミ旅行は学生たちが旅行プランを考え、先生やゼミ生へプレゼンテーションを行います。

ゼミ活動の一環として栗林公園に来園する外国人の方に英語で観光案内を行ったり、アンケートを実施したりしています。